

「地方消滅」時代の若者の「地元」意識の現状と構造

安立, 清史
九州大学大学院人間環境学研究院人間科学部門共生社会学講座

<https://doi.org/10.15017/4755927>

出版情報：人間科学共生社会学．7，pp.59-70，2016-09-16．九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



「地方消滅」時代の若者の「地元」意識の現状と構造

安 立 清 史

要 旨

「地方消滅」の時代に、若者がなぜ「地方」から流出していくのかを意識構造から分析するために、高校生と大学生に「地方」と「地元」という2つの概念を用いたアンケート調査を行った。対象はF県立D高校の全校生徒および九州大学学生である。調査結果から、若者は「地元」ではなく「地方」として見てしまうと、衰退する「地方」から脱出していこうとする。「地方」とは違う「地元」という意識への転換と「地元」意識を持つための地域社会への参加の入り口や役割も必要となる。

キーワード：「地方消滅」論、消滅可能性都市、「地方と地元」、地元意識、「地元以上の地元」

はじめに

現代の若者¹⁾は、「地方消滅」や「地元」のことをどうとらえているのだろうか。ここでは、2015年7月に行った、高校生と大学生の「地元」意識アンケート調査結果を紹介する。まず、福岡県Y市にある県立高校であるD高等学校にて、全校生徒649名にたいして実施した。Y市は、2016年2月末現在で人口は68,529人であり、観光では有名だが人口は毎年700人程度が減少している。市内に大学がないこともあり、若者世代の市外への流出がつづいており「消滅可能性自治体」のひとつと名指される原因となっている。調査方法は、学年末のホームルームの時間帯に全校生徒にアンケート調査を配布してもらい、教室の中で記入してもらい回収するという自記式のアンケート調査を行った。ついで福岡市にある国立大学法人・九州大学で実施した同じアンケート調査の結果と対比し比較検討する。福岡市は人口約154万人（2016年現在）、大学が多く所在することもあって人口流入が多く、平均年齢も全国の政令市の中でもっとも若い。人口増加率も全国の政令市の中でもっとも高いなど、一見したところ「地方消滅」とは無縁な状況にある。このような対照的な状況にある大学の学生たちの「地方消滅」や「地元」意識はどういうものか、2015年7月に、主として1年生が学ぶ伊都キャンパスにおける「社会学入門」の受講者および主として2年生以上が学ぶ箱崎キャンパスの「社会学入門」の受講生に、授業の終わりに教室の中で配布して教室の中で記入してもらい回収するという自記式のアンケート

調査を行った。

このような調査形式であるため、現在の若者の「地元」意識を探るという観点からは、多くの留保や限定をつけなければならないのはもちろんである。しかし以下のような理由から、この調査データは若者の「地元」意識を探る仮説形成としての意味を持つものとする。第1は、同じ時期に同じ県内に住み暮らす高校生と大学生の共時的なデータであること。第2に、現在の若者一般についての実証ではなく、若者の中に生じている「地元」意識の生成や変化についての仮説形成を行うことを目的としたこと。第3に、高校の全校生徒へのアンケート調査などは、学校側のよほどの理解が得られなければ実施が困難になっており、今回のデータは、その意味で貴重であること。第4に、大学生のデータは、ある特定の科目での調査であり、サンプリングや代表性など、多くの問題があるにもかかわらず、高校生のデータと対比することを通して、その類似性や共通性が確認されたという発見的な効果があったこと。以上、今回のデータには多くの偏りや問題も含まれているが、このデータを「実証」データとしてではなく「仮説形成型」のデータとして用いていくという限定的な目的のために活用していくことにする。ここから抽出された仮説は、今後にむけて発展的に検証していく中で、次の調査研究にもつながっていくものだと考える。

1 「地方」と「地元」—その概念整理

「地方」と「地元」という次元の異なった二つの概念を提起してみたい。われわれの基本仮説は次のようなものである。「地方」は「中央」からみた場合に現れる地理的・政治的・行政的な概念である。究極的にいえば東京以外はすべて「地方」になってしまうような「中央」集権的な見方を含むものでもある。このように「中央」からみた視線、「中央」にたいして「地方」が従属するような価値観を含んだ見方なのだが、法律や行政用語はすべて「地方」を採用していることもあって、一見、主観を排した客観的なように見えてしまう概念なのである。それにたいして「地元」はきわめて主観的な概念である。地理的にみると分散的な概念であり、「中央」を想定せずとも、そこに住み暮らしている人々の視点であり、いたるところ無数に存在する見方である。それゆえに主観的で客観性を欠いた視点とみなされ、法律や行政、社会科学などでは、ほとんど用いられない用語である。いわば地域の共同体相関的にあらわれてくる主観的・生活的な概念であり、日本全国（いや世界中）どこにも、人が暮らすところには、無数の「地元」があることになる。「地方」という概念は、行政関連的に現れてくる視点であり、自治体や行政にとってもっとも利用しやすい見方であり概念装置である。それにたいして「地元」は、そこに生きて暮らしている人々の視点相関的にあらわれてくる概念なので、自分たちの暮らしている地点への愛着や愛憎が濃厚にともなう概念である。このように「地方」には整序して位階順位付けする機能があるが、「地元」にはどのようなメリットがあるだろうか。この「地元」という概念を用いる理論的な利得とは次のようなことである。それは若者にとっての流出（プッ

シュ要因）と定住要因（プル要因）とを、愛着や反発などといった主観的な要因から説明することを可能にするからである。従来の客観的な要因だけでは、若者の「地方流出」を十分には説明できない。それにたいして「地元」概念は、若者の心理葛藤をとまなう内面からの理解を可能にするのである。

「地元」は「地方」という概念の部分集合ではなく、独自の存在である。したがって交差する部分とすれ違う部分がある。行政にとっては「地元」概念にもとづいた施策はできないが、生きて生活している人びとにとってのリアリティは「地元」のほうにあるのだ。

さて、このように整理したうえで、若者にとって「地元」と「地方」はどう違うのか。生まれ育って暮らしている場所は、「地元」なのだろうか、「地方」なのだろうか。

D 高校生にとっては、現状では「どちらでもある」という曖昧な位置にあるようだ。大学生にとっても、事情はさほど変わらない。

2 「地方」と「地元」の狭間で揺れ動く

「地元」に根ざして長年そこで暮らしている人たちにとって、「地元」は自明な存在に違いない。だが、若者にとっては、どうであろうか。データをみるかぎり、若者にとって「地元」は自明ではない。むしろ「地元」ではなく、「地方（のひとつ）」として見てしまう傾向があるようだ。アンケート調査の結果でも、「地方の衰退」という客観的な認知と、「地元の衰退」という主観的な認知との微妙な落差が認められる。ここに現れている「地方意識」と「地元意識」の微妙な混合と落差に注目したい。

若者にとって「地元」意識と「地方」意識とは混合して存在している。極論すれば「地方」の問題は、若者にとっては一般論でどこか他人事である。しかし「地元」のほうは具体的で当事者的な感覚を呼び覚ます。この構造は、後の大学生にも共通している特徴である。

若者にとって「地方の衰退」は「心配だから何とかしよう」ではなく「はやく脱出しよう」という意識になっていく。しかしたんに脱出するのではなく、気になりつつ、しかし、今は出て行くべき時なのだ、という意識へと変化していくものが感じられる。二つに引き裂かれている高校生の「地元」意識は、「地元」から出て行くことへの抵抗感の「あり／なし」の「3対7」という比率にも表れている。高校生の「心」は現在の「地元」から離れつつあるように見える。その理由をさらに探ろう。

3 若者の「地元」意識はまだ形成途上にある

高校生や大学生は、「地方」意識は持っているが、現在はまだ「地元」意識は持っていない、あるいは持つ途上にあると考えることができよう。それを証すものがアンケート調査データの中にある。それは「地元の良いところ」や「地元に求めるもの」がきわめて一般的でありふれ

たものであることだ。これは、若者が考える「地元」が、「地元」らしいものではなく、「地元」固有のものでもないこと、「地元」というイメージで考えているだけで、ほんとうの「地元」には到達していない、そういうことを示していると思われるのだ。「地元」という主観は、「地方」という客観ほど、すぐには身につくものではない。若者は、情報社会の中で、すぐに「地方」という見方を内面化してしまう。情報空間の中では、東京が圧倒的な「中心」であり、その他はみな「地方」になっているからだ。情報空間の中で、情報にふればふれるほど、若者は「地方」にいる自分という存在を確認してしまう。そして「地方」の中でもさらにその周辺の「田舎」にいる自分を意識してしまう。情報社会の中で、ほとんどの若者は、「地方」在住の存在、として自己認識してしまうのだ。

感受性のするどい、向上心や向学心のたかい学生や若者ほど、「地方」にいる自分を意識し、「地方」から脱出していきたいと思うはずだ。それは「中央」と「地方」という枠組みの中で、価値の上下が決まってしまうからだ。この枠組みは強固だ。そのうえ、受験というシステムの中でさらにそれが強められる。若者たちは、学校の中で、そして受験の中で、「地方」から「中央」へと上昇しなければならない、という価値観の刷り込みを受けている。これは学校教育の中で、集合的・潜在的・無意識的に行われているものなので、この枠組みから脱出することは、高校性のうちは困難だろう。大学生になっても、基本的に、この枠組みは変わらないことが、大学生のアンケート調査からも分かる。

転機があるとしたら、それは、大学3年生あたりから始まる就職活動を通じてだろう。就職活動を通じて、大学生たちは、現在の「中央」が「地方」にたいして格段にすぐれた魅力あるものではないことを認識していく、あるいは、そのような幻想が剥がれおちる体験をしていく。2000年代以降に「若者の地元志向が生まれている」と、しばしば論じられてきたが、そのきっかけも、グローバル化による日本経済の弱体化と雇用の劣化からであった。わざわざ「中央」へ出て行って就職しても、雇用条件は劣化し、住宅・生活環境もよくなりたしないとしたら、わざわざ「中央」に出て行く意味がない。それより「地元」で人間関係豊かな生活を選択する若者が増えてきた、そう論じられてきた。その場合の「若者の地元志向」は、都会と田舎暮らしとの中間地点なのだと論じられてきた（阿部真大『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』など）。

しかし今回の高校性と大学生のアンケート調査結果からは、そのような「まったり」した「地元」意識とは違う位相が見いだせる。「地元」は「都会と田舎の間」というような場所ではない。そのようなまったりした場所は「地方消滅」の時代に急速に失われている。現在の若者はもっと追いつめられている。われわれがフィールドワークやアンケート調査から発見したのも「田舎暮らし」といった牧歌的な「地方」イメージではない。むしろ「地方」も「中央」も都会も田舎も、不可能になりつつある現在、「地元」こそが最後の拠り所になりつつある、そうした現実なのである。

4 若者は自分の「地元」を作れるか

現在、若者の目の前にあるのは「地元」ではない、「地方」だ、そう論じてきた。したがって今のうちに、「地方」という意識ではない「地元」という意識を形成できなければ、若者は今後もしも流出していく可能性が高い。「地元」が「地方」と感じられるようになると、若者は流出していくことになるのではないか。このことを考えさせられたのは、Y市出身の九州大学生の葛藤にみちた自己省察であった。その学生は大学に入るまで「地元」のことが「大嫌いだった」と振りかえる。なぜなら「塾もない、お店もない、遊ぶ場所もない、ダサイ地方の田舎にすぎない」からだだったという。必ずしも実際がそうだというわけではない、若い頃にそう見えたということが重要である。つまり若い世代は、まずは、消費者目線で、自分の生まれ育った地域を見渡すのだ。そして「ここから脱出したい」とねがうことになる。それは「生まれ育った地元への反抗期」のようなものののだ。

だからまず若者は消費者目線にたって「地方」を見てしまうのがふつうなのだ。その後に、あらためて「地元」として見直す価値観と目線とを再獲得する、そう考えるべきではないか。若者のこの心理的な葛藤と「地元」意識の獲得のドラマツルギーを考えさせてくれる好個の素材がある、それがNHKの朝ドラとして2013年に放映された「あまちゃん」だ。「あまちゃん」が画期的だったのは、グローバル資本主義の時代に、日本の「中央」が輝きと自信を失った時代の若者が、いかにしてグローバルな世界への志向ではなく、むしろ「地元」を深めていく志向を獲得できるか、という問題提起だったからだ。これは、見田宗介が「現代社会はどこに向かうか」で提起した問題、経済成長の終わったあとに、いかにしてこの高原状態（プラトー）を豊かなものとして持続させられるかという問題提起と、見合ったドラマだった。「あまちゃん」の中では、3つのファクターが、若者に「地元」を見直させる契機となっている。第1は「3代」に渡って海女の仕事に誇りをつないできた家族の系譜、第2は「スターでないアイドルの時代」「東京のアイドルではない地元のアイドル」という価値観の転換、第3は「地方消滅」そのものといってよい地方都市の衰退と、それに追い打ちをかけるかのような東日本大震災やそれにつづく災厄の連打。こうしたファクターの中で、「地元」の人々の連帯と団結と行動力こそが復興への原動力になるのではないか、そうドラマは問いかけてきた。若者だけでは「地元」視線を獲得することは難しい。それは地域共同体全体の課題でもある。若者が「地元共同体」という視点をどう獲得していけるか、「地方消滅」時代の大きな課題だろう。

まとめ

以上、アンケート調査から見てきた現在の若者の「地元」意識について概観してきた。そこから見てきたことは、時代や社会が「地元以上の地元」を必要としているということである。どういうことか。

冷戦の終わった1990年代以降、世界は一挙にグローバル資本主義化した。そのグローバル化についていけず日本社会は「失われた20年」を経験している。その結果、経済は停滞し雇用も不安定化・劣化した。「日本」は自信を失い、社会全体が不安定化している。若者の間に「地元志向」が生まれたと言われるのはこの頃からである。

そもそも雇用の劣化と社会の疲弊をもたらすグローバル化に同調して行っても良いものだろうか。このグローバル化の先に、若者の居場所と将来はあるのだろうか。そういう不安のうらがえしとして「地元志向」は現れてきたに違いない。でも、その「地元」も人口減少と衰退という厳しい現実には直面している。

社会学者・新雅史の『商店街はなぜ減びるのか』によれば、地方の多くの「商店街」は戦後の復興期に形成された。現在、シャッター通りになっている商店街の多くは、商売や売り上げが原因ではなく、家族で築き上げた商店が、子どもたちに継承されないところに大きな原因があるという。「店の家族世代間の継承困難」が主原因だとすれば、町おこしは、商工業の振興だけでは足りない。問題は「地元」を出て行く若者の「選択」であるとともに、親たちの「諦め」でもあったのだ。親たちも「地元」には若者にふさわしい仕事や役割がないと諦観するような、いわば「地元」を「地方」を見るような目線で考えるようになっていたのである。

しかし今や「地方」を出て行っても、その先の「都会」にも仕事や居場所がない、そういう閉塞的な状況になってきた。こういう時代だからこそ「地元」が見直されている。しかし、その求められている「地元」はかつての「地元」とは違うのだ。別稿で論じるようにそれは「地元以上の地元」をめざすことの中から現れてくるものではないだろうか。

注

- 1) 「若者」とは誰か、その厳密な定義は困難である、いや不可能ですらある。しかしここではリサーチの実施のために、とりあえずの第一次近似の操作的な定義として高校生と大学生ということにしておく。

文 献

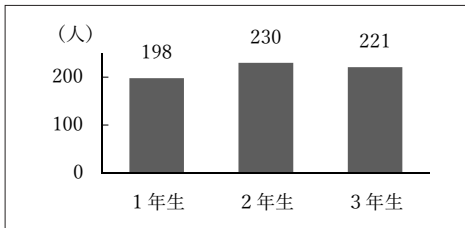
阿部真大, 2013, 『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』, 朝日新聞出版

新雅史, 2012, 『商店街はなぜ減びるのか—社会・政治・経済史から探る再生の道』, 光文社

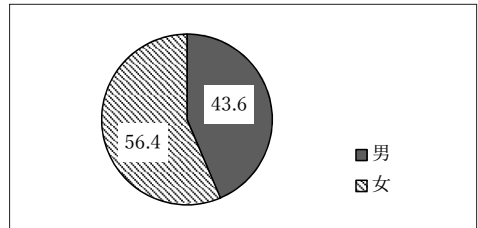
仁平典宏, 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉—“贈与のパラドックス”の知識社会学』, 名古屋大学出版会

大澤真幸他, 2016, 『ぼくたちは未来にどうこたえるか』, 左右社

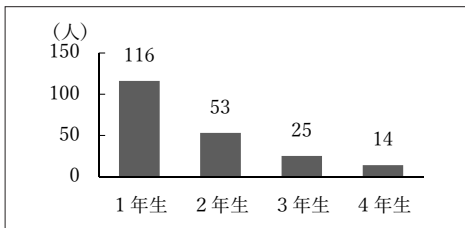
D 高校生データ学年別生徒数 (n=649)



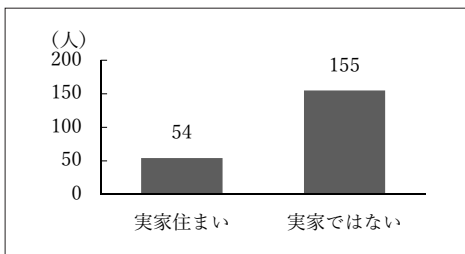
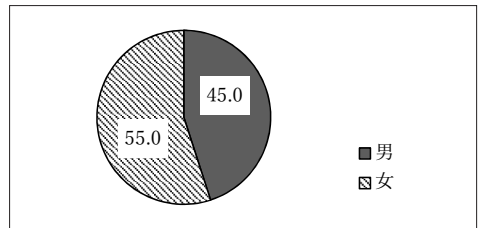
性別 (n=649)



九州大学生212名

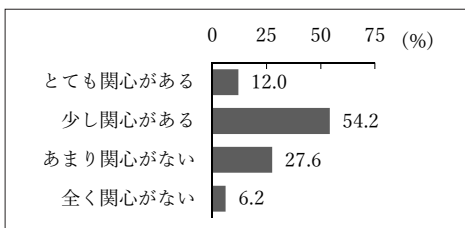


性別 (n=211)

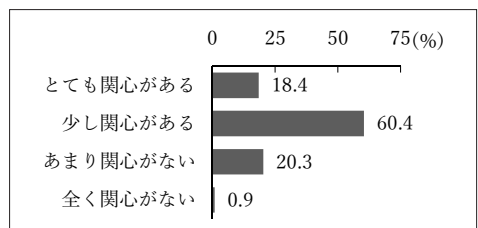


問1 あなたは、「地方の衰退」という問題に関心がありますか。

高校生 (n = 649)



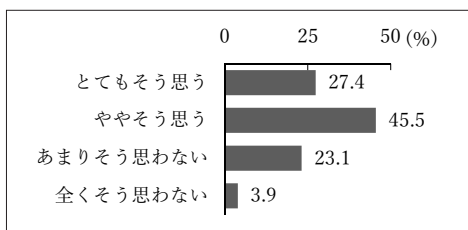
大学生 (n=212)



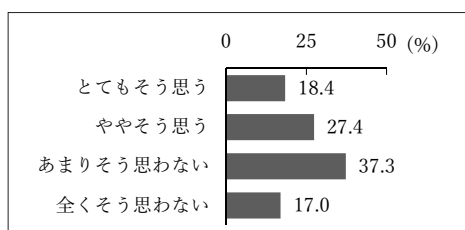
* 高校生と大学生とで「地方の衰退」という問題への関心度が、きわめて似ていることに驚くべきではないだろうか。類似しすぎているくらい類似する、これは実生活や実体験にもとづくものでなく「情報」環境によって与えられたイメージを共有していることから生じる類似とも考えられる。なお、大学生の場合には、自宅生でも自宅外生でも、有意な違いは見いだせなかった。

問2 あなたは自分の地元が衰退していると思いますか。

高校生 (n=648)



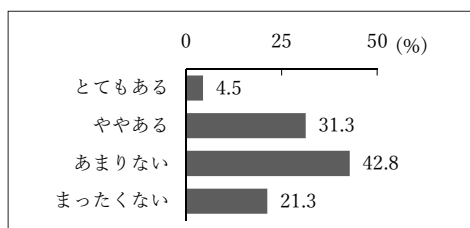
大学生 (n=212)



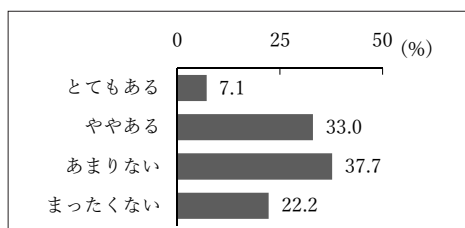
* 顕著な違いの原因は九州大学が福岡市に所在するところにあるのだろうか。現在暮らしている場所も「地元」のひとつであるとしたら、福岡が「衰退している」とは受け取れない可能性が高いから。それにたいしてY市では7割もの高校生が「衰退している」と感じている。観光では全国的に有名な町であるが、観光以外は農漁業が中心で、人口は毎年700名程度が減少している。グローバル化の荒波の中で、若者の職場が少ないという。それもあって増田らの「地方消滅」論の中では「消滅可能性自治体」の896のひとつとされている。それも影響しているのであろうか。

問3 あなたは進学や就職のため、自分の地元をはなれることに抵抗感がありますか。

高校生 (n=648)



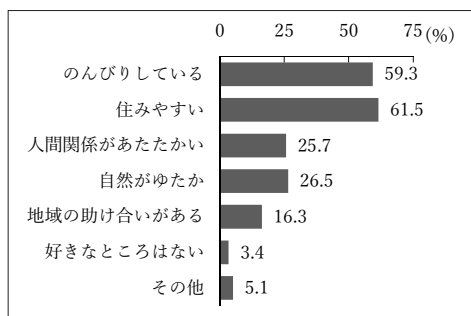
大学生 (n=212)



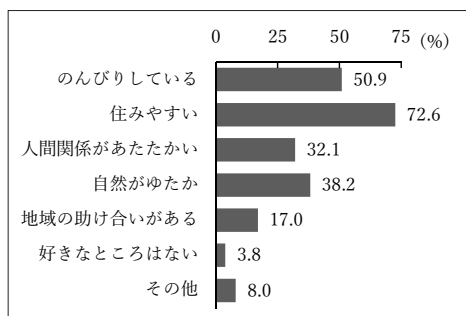
* またしても高校生と大学生のこの類似にこそ、現在の「地元」の課題の一端が現れていると考えることができる。若い世代は、「地元」以上に自分の将来に関心があるのだ。「地元」に固着したり殉じたりする心性よりも、新しい挑戦や可能性に賭けようとする心性のほうが大きく上回っている。「地元」からの脱出をめざす心性は、高校生のほうに、より顕著に現れている。

問4 あなたは、自分の地元のどこが好きですか。〔複数回答〕

高校生 (n=647)



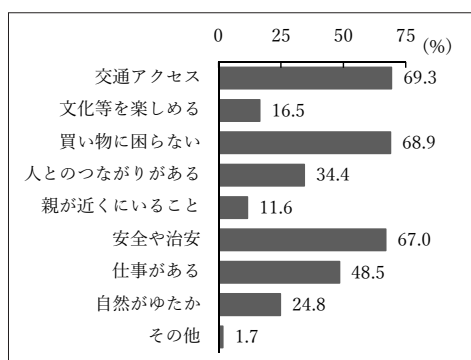
大学生 (n=212)



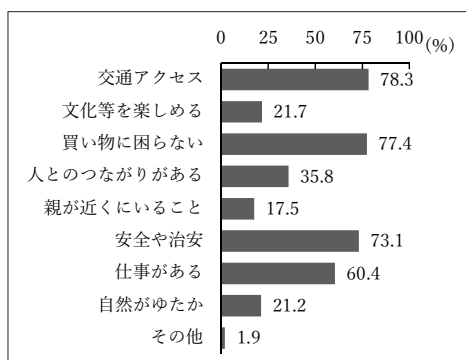
* 若者にとっての「地元」意識の特徴が、ここには現れている。まず第1に高校生と大学生の選好がきわめて類似していることに注目すべきだろう。「住みやすい」そして「のんびり」していることが大きな二つの理由である。考えてみれば、これは同じことの両面のようなものだと考えられる。若者にとっての「地元」の良さは、積極的に選択され、能動的に評価されるような特性をもっていない。生まれ育って安心してのんびりしていただける、そういう安全で安心な場所のことがイメージされている。いわば消極的に選択された理由、理由でない理由とでも言えるものだろう。反対に積極的な理由となりうる「人間関係」や「地域の助け合い」などは、高校生でも大学生でも、ほぼ同じ比率だがあまり高くない。積極的な選択理由はないが、消極的に選好される場所、それが若者にとっての「地元」ということだろうか。

問5 あなたが、住む場所に求める条件はなんですか。〔複数回答〕

高校生 (n=647)



大学生 (n=212)



* またしても若者の意識の逆説的な姿が、ここに浮かび上がっている。高校生と大学生の求める「住む場所」の条件が、驚くほど似ていることに驚かされるのである。「交通アクセス」と「買い物」と「安全や治安」が、両者ともにもっとも高く選好される「理由」である。

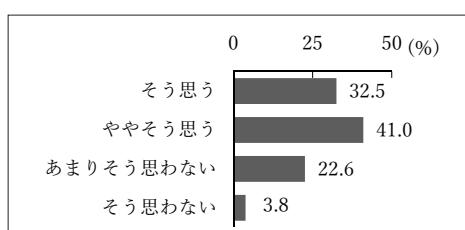
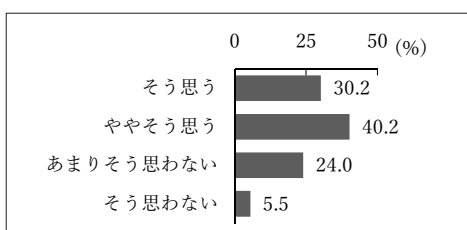
しかし、これらの条件は「便利さ」を言い換えただけの、つまり、「地元」という特性のある場所とはまったく無関係の指標である。人間のアイデンティティ（家族、人間関係、仕事）や地域の特性（文化、自然）とは無関係な一般的な便利さが、若者には無意識的に選好されていることを意味しているのだ。これらの条件をあてはめれば、「地元」以上に便利な場所は無数にあり、便利な場所へと若者は流出していく、ということの意味しているのだろうか。必ずしもそうとは言えない。そのことを以下の結果から見ていこう。

若者は、将来、「地元」に戻ってくるか？

問6 あなたは、進学や就職などで自分の地元を離れることがあっても、将来は、また戻ってきたいと思いますか。

高校生（n=649）

大学生（n=212）

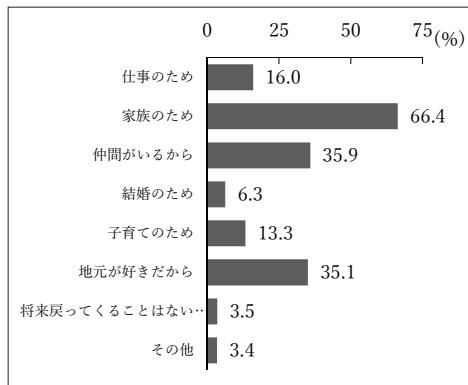


*ここでも高校生と大学生の意識が驚くほど類似している。約7割の若者は「将来、地元に戻ってきたい」と答え、約3割は「そう思わない」と分かれている。相対的に少数ではあるが「戻るつもりはない」ときっぱり言い切る若者も一定数存在している。「地元」に対する何らかの葛藤が、若者の心性の中に存在することを示している。それは比率だけでは判断できないもので、一般的には「地元を大切にしていると思われたいし、そのように振る舞う」が、地元の現状にたいする漠然とした不満や、もっと自分の可能性を羽ばたかせたいという気持ちが、拮抗しているとも言えるのではないか。この数字をどう読むか。若者の心は、揺れていると見るべきではないだろうか。

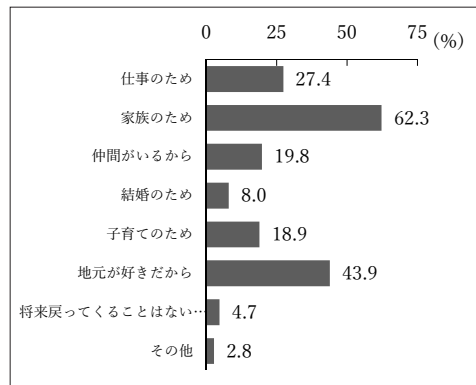
問7 将来、あなたが地元に戻ってくるとしたら、その理由は何になると思いますか。

〔複数回答〕

高校生（n=646）



大学生（n=212）

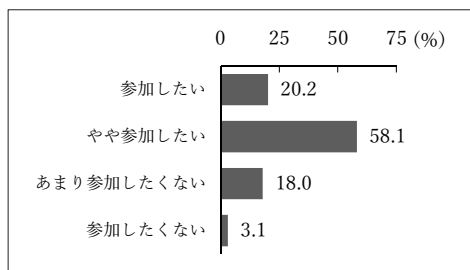


* ここにも高校生と大学生の傾向の類似が強く表れている。若者にとって「地元」への吸引力の一番の源は「家族」にあるようだ。その「家族」は、これからずっと若者たちを「地元」へと引きつけ続けられるだろうか。家族社会学では「家族」は二つの側面から考えられている。そこで生まれ育った「家族（定位家族）」という側面と、結婚して新しく形成する「家族（生殖家族）」という側面のふたつである。ここで若者があげている「家族のため」という場合の「家族」は第1の「定位家族」を意味しているだろう。しかし「結婚のため」や「子育てのため」の場合の「家族」とは第2の「生殖家族」を意味するはずだ。若者にとっての「家族」とは、ふたつの「家族」への分岐点上にある。つまり「家族」は「定位家族」から「生殖家族」へと切り替わっていく途上であり、今回の年齢層のアンケート調査では、まだ切り替わる前の「家族」のことを念頭に回答されていると考えられる。ここから導かれる結論は、「家族」は若者と「地元」とを結びつけるもっとも大きな絆帯だが、「定位家族」にとっての「地元」だけを念頭に、若者の「家族」と「地元」を考えるわけにはいかないということだ。やがて若者は「定位家族」を離れて「生殖家族」へと指向することになる。その時、「地元」についても、同じ移動が起こることになるのではないか。

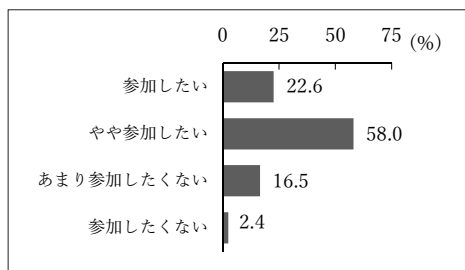
「地元」と高校生との接点

問 8 あなたは、自分の地元のために、何か出来ることがあれば参加したいと思いますか。

高校生 (n=645)



大学生 (n=212)



*ここでも高校生と大学生の意識は、きわめて似ていることに驚かされる。とりわけ高校生にも大学生にも「地元」のために何かしたいという意識があわせて約8割もあることは、学校内での配布式アンケート調査ということを差し引いても、驚くべきことだ。しかし問題はその先だ。何かをしたいという気持ちはあるが、では具体的には、何を、どうしたら良いのか、そこは茫漠としている。若者は、「地元」との関わりを求め、その入り口や役割を求めているのだ。若者にとって、これが「地元」だと思える場所や、ともにその「地元」をつくっていくような、仲間や居場所が必要なのだ。